

古地図片手に まちを歩けば 大阪がもつと 楽しくなる！

生まれ育ったまちの 古地図を見る

酒井裕一さん——。「古地図」というキーワードで頭に浮かんだ1人です。大阪のまち歩きツアーを企画・運営する「大阪あそ歩」のガイドであり、「古地図で愉しむまち歩き」を実践。今年4月に開館25周年を迎えた「大阪くらしの今昔館」のミュージアムボランティア「町家衆」としても、活躍されています。大阪生まれの大阪育ち。大阪市職員として35年間勤務し、退職後の人生を大阪のまちにささげている、そんな大阪愛あふれる酒井さんに、お話をうかがいました。



酒井さんが古地図に興味を持つようになったのは、40〜50代の頃。大阪市都市整備局に勤務し、「HOPE（ホープ）ゾーン事業※」にかかわっていました。平野郷、住吉大社周辺、空堀：と順にHOPEゾーンに指定し、歴史あるまちに住む地元の人と話をしているなかで、そのまちについて知らない話ができないうと感じた酒井さんは、古地図を開き、まちの歴史を調べるようになったそうです。

「自分の生まれ育ったまちの古地図も見るようになりました。思い出とつながって楽しいですよ。ああ、ここに昔、駄菓子屋があったな、この学校に通っていたな。今度、今の様子を見に行ってみよう、となるんです」と酒井さん。「今ある建物が、どこからどうやってここにきたのか、年代ごとの地図を見比べながらたどっていくのもおもしろいし、なぜ移転したのか、変遷の歴史を探るのも楽しいんです」。

2001年（平成13）には、「住まいの歴史と文化」をテーマにした日本初の専門ミュージアム「大阪くらしの今昔館」が開館し、その運営にもかかわりました。そのときの経験も、今に大きく影響していると言います。

大阪くらしの今昔館の8階には、本誌8〜9ページでも紹介している「大阪市パノラマ地図」が、床いっぱい広がっています。足元

の地図を眺めながら、「大坂城の天守閣はまだないですね。西區三軒家（現在の大正区）に『美濃部』の文字があります。この地図の著作者、美濃部政治郎の家が、こっそり描かれているんです」と話は尽きません。

アプリがおススメ！

「古地図で愉しむまち歩き」を実践する酒井さんに、普段どんな古地図を使っているのか聞いてみたところ、意外にも「アプリがおススメ」とのこと。例えば「今昔マップ」。明治期以降の新旧の地形図を同一画面に表示でき、簡単に見比べることが出来ます。

「関西時層地図」は、明治中期以降の関西の変遷をたどることが出来る地図アプリです。GPSに対応しているのので、自分が古地図のどこに居るのか分かって、プチ・タイムトリップ感！地形を感じる3D地図アプリ「スパー地形」は、さまざまな地図や航空写真と地形を重ね合わせることができ、高低差マニアには、たまりません。最後に、私も知っていた「Stroly（ストロリー）」。観光地の紙のイラストマップなどを取り込んで表示し、GPS機能でまち歩きを楽しむことができるというイメージでしたが、じつは、運営サイドによっていろいろな古地図が収録されているんです。

さまざまな便利ツールがあふれている今、使わない手はないですよね？ みなさんも、古地図を片手にまちを歩いて楽しんでみませんか？（秋山暁子）

※HOPEゾーン事業 歴史的・文化的な雰囲気やまち並みなどに恵まれた地域で、大阪市が市民と連携・協働して、地域特性を生かした魅力ある居住地づくりを目指す事業

キタを愛する人たちのための、キタを再発見するマガジン。ネットに載らない情報テコ盛り。

つながるひとまちぶんが

つひまぶ 古地図号 5 2026 月号

北区魅力発信フリーペーパー「つひまぶ」vol.28 2026年5月1日発行 編集・発行：北区のおもろ通信団（編集長／浅香保ルイス龍太 編集スタッフ／秋山暁子・寺井はるか・西野仁）協力：大阪市北区・北区コミュニティセンター・奈良県立大学地域創造研究センター 連絡先：[mail] tsumimabu@gmail.com [web] https://tsumimabu.com 定価：0円 主な配布場所：大阪市北区役所・北区民センター・大淀コミュニティセンター・北図書館・大阪府立中之島図書館・大阪市北区社会福祉協議会・江之子島文化芸術創造センター・大阪市ボランティア市民活動センターほか多数（配布場所はwebにて随時お知らせします）※当雑誌の内容、テキスト、画像、イラスト等の無断転載・無断使用を禁止します。



新撰増補大坂大繪圖

浪華名所獨案内

大阪市パノラマ地図

国土地理院 2.5 万分 1 地形図
大阪東北部 1967 測量

戦災概況図 大阪

古地図マイスター・本渡章さんと
梅田を歩こう！

大阪あそ歩ガイド・酒井裕一さんに
聞く 古地図活用法



今昔マップ on the web
明治期以降の旧版地形図と現在の地図を2画面または4画面で並べ、時系列で比較できる。



関西時層地図
京阪神奈の明治中期以降の地図、航空写真など約20種類を収録したアプリ。アプリ内の大半が有料。



スパー地形
高精細 3D 地形表現が特徴の GPS 対応地図アプリ。山やまちの「高低差」を鮮明に可視化。



Stroly (ストロリー)
位置情報と連動したオンラインマップのプラットフォーム。誰でも自由に地図が作成できるのも魅力的！

編集後記

酒の話 Facebook するたび、「鋼鉄の肝臓ですな」と大阪編集界のレジェンド★140Bの中島淳氏にいじられはじめたことを誇りに思っている秋山暁子が今号、満を持して？送る新連載「暁子の角打ち放浪記」。記念すべき第1回の記事作成を通じて「スキ♡を仕事にすることの大切さ」を学びました。とにかく取材が楽しい。取材先の選定からして楽しい、聞きたいことは次々浮かぶし、取材中に原稿のイメージが湧いてくるし、そんなことよりさっさと終わらせて飲もう！と必死だし(笑) 取材にかこつけて正々堂々飲んじゃうなんて職権乱用も甚だしいけど、これは仕事じゃなくボランティアやねん。好きなことしたら、えーやん♡ で、いつもは時間がかかる原稿もあったという間に書いて提出。すると、いつもはあちこち手入れしてもらうことになる編集長から「直すところないわ」と一発OK、キター-----!! さあて、次はどこに行こう。半年に1回の取材になるので、頭の中の仮予約は3年先まで埋まっています。(秋山暁子)

つひまぶ web
https://tsumimabu.com/
バックナンバー読めるよ!

「つひまぶ」では、編集メンバーを随時募集しています。興味がある方は、Facebook ページ「つひまぶ」までご連絡ください。

さて、北野、曾根崎、長柄、本庄、豊崎、中津、大仁と浦江（現在の淀川地域）は、まだ市外の村落。都市の喧騒とは一線を画す静けさのなかにある。まだ、茫々としたあけぼの。（終）

天満に目を向けると、寺社が東西にずらりと並び、ここが「寺町」。大坂の陣の後、都市の再建計画の一環として、あちこちに散らばっていた寺社がここに集められ、北の防衛線とした。

天満宮から南へ下り、淀川（現大川）北岸に出ると、「天満八百物市場」とある。天満青物市場のことで、大坂の食生活を支えた、ここがまさに「台所」。

天満宮の東側には、大坂町奉行所の与力・同心の組屋敷が並び、大坂城の北西（堂島・中之島周辺）は、淀川舟運と西国街道、船場商業地が集中する交通の要衝。この場所にそれらを置いたのは、都市防衛の意味もあつたに違いない。

一方、後に大坂の歓楽街の原点となる曾根崎新地や堂島新地は、まだ影もかたちもない。堂島新地はようやく埋め立てられたばかりで、土地はあれどまちはない。江戸中期に登場する「公許の遊興地（遊郭・料亭地）」もまだ、ただの広い空き地だ。

「難波橋」「天神橋」「天満橋」は公儀橋ゆえ特に立派に描かれている。ただ、中之島の東端はまだ難波橋に届いていない。延伸されるのは、18世紀半ばの改修工事まで待たねばならない。

中之島に記された全国諸藩の蔵屋敷には、「松平安芸守（広島藩）」や「毛利甲斐守（長門長府藩）」「有馬中務（久留米藩）」などの表記が見える。大名の名なので分かりにくくも、地図を見れば一目瞭然だ。

土佐堀川と堂島川には橋がいくつも架かり、「大江橋」や「越中橋」など、現代に続く橋も多い。

中之島に記された全国諸藩の蔵屋敷には、「松平安芸守（広島藩）」や「毛利甲斐守（長門長府藩）」「有馬中務（久留米藩）」などの表記が見える。大名の名なので分かりにくくも、地図を見れば一目瞭然だ。

『新撰増補大坂大繪圖』が発行されたのは、1691年（元禄4）。大坂は、まさに江戸時代中期の繁栄のピークを迎えていた。日本全国から物資と情報が集まり、「天下の台所」と呼ばれた熱気と勢いに満ちた都市の空気が、この地図にはたっぷりと描かれている。

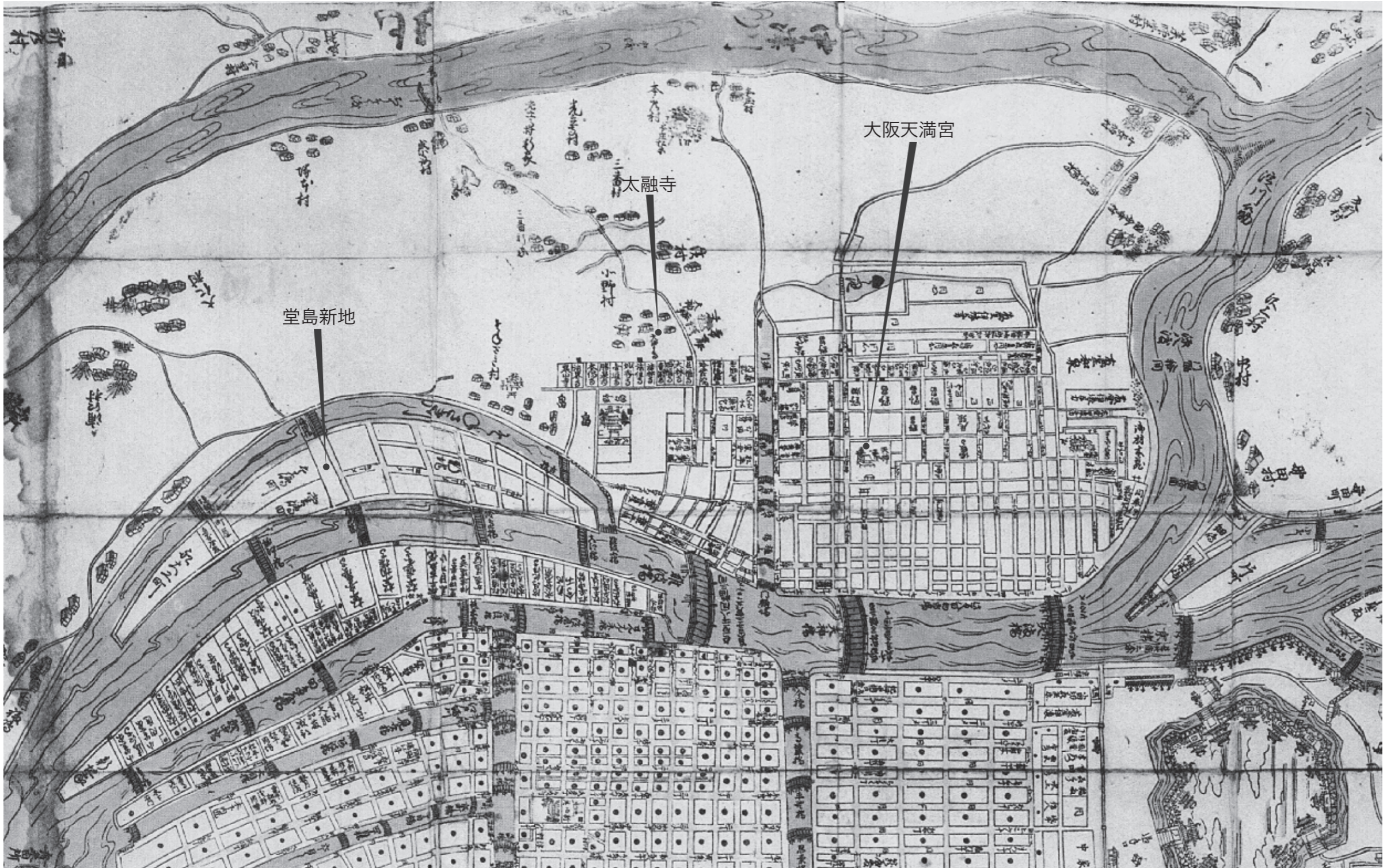
当時の大坂は、大坂城を中心に四方へとまちが広がり、「大坂三郷」（北組・南組・天満組）の体制がすでに整っていた。

まち割りは整然とし、堀川が縦横に走る「水の都」では、運送の主役は船。運河沿いには米蔵や問屋がびっしりだ。なかでも堂島川や土佐堀川沿いには諸藩の蔵屋敷が立ち並び、全国から届いた年貢米がここで取引された。後の「堂島米市場」につながる、まさにその萌芽期ですな。

市中といえ 天満と中之島 堂島はできたてホヤホヤ 北野や曾根崎は田園地帯



つひまぶ編集長 浅香保リス龍太



現在の北区はだいたいこの枠内



『新撰増補大坂大繪圖』（元禄4 / 1691）
1684年（貞享元）の河川改修工事によって変化したまち並みを表現するために、作成された。大坂城天守閣は1665年（寛文5）に落雷で焼失したので、描かれていない。





江戸時代後期の大阪が、どのようなまちだったかご存じだろうか。当時の大阪は、江戸をも凌駕する日本一の経済都市。蔵屋敷が立ち並び市場が活況を呈する「天下の台所」であり、最先端の文化が開く「水の都」でもあった。そんなゴージャス都市を観光したいとの人々の熱いニーズに応えるべく、天保年間（1830年代ごろ）に登場したのが、ここで紹介するスーパー観光マップ、『浪華名所獨案内』だ。

に晝鐘成が描いたものだ。晝鐘成は浮世絵師であり戯作者でもある、いわば当時のマルチクリエイター。大坂の文化人ネットワークの広がりも感じさせる。

色分けされた「モデルコース」が

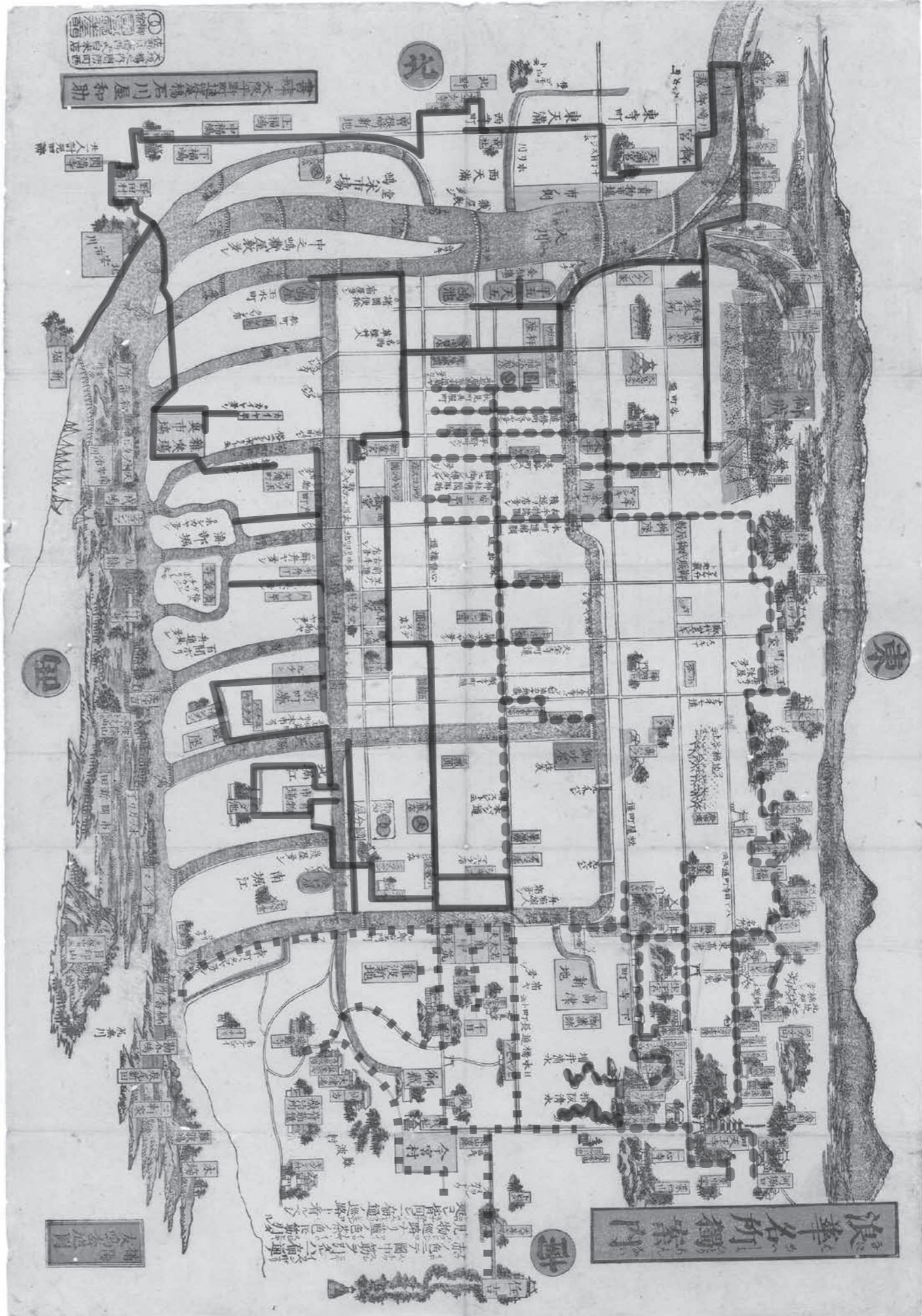
『浪華名所獨案内』が画期的といわれる最大の理由は、現代の観光マップにも通じる、

「天下の台所」を歩き尽くせ！ モデルコース付き 観光マップ

つひまぶ編集長
浅香保ルイス龍太

ツールとして無料で作成・配布した、いわば当時のフリーペーパー。しかし、そのクオリティーは現代の観光マップにも決して劣らない。「獨案内」の名のとおり、「これ1枚あれば、誰にも頼らずに1人で観光できる！」という強い自信が込められた力作なのだ。

「色分けされたモデルコース」が載っている点にある。地図を広げると、主要なルートが赤、青、茶といった色で鮮やかに線引きされている。つひまぶは残念ながらモノクロなので、色ではなく実線、丸破線、角破線で表現してみた。お分かりだろうか？「赤の色にて図中筋を引きたるは一遍通りの見物巡路なり」と説明されているとおり、この線に沿って



『浪華名所獨案内（友鳴松旭版）』吉田家文書（編集部追記：実線は赤コース、丸破線は青コース、角破線は茶コース）

扇町公園のあたりにあった ゴミの山「ゴモク山」

『浪華名所獨案内』は観光マップであると同時に、当時の都市の姿を知ることができる都市地図でもある。では、現在の北区は当時、どのようなまちだったのだろうか。天満宮南側、大川沿いにある天満青物市場。その西側に記された「市ノ側」は、青物市場とひと続きになった、野菜以外の商品を扱う市場だった。

「蔵屋敷多シ」の中之島は、現在とは違い、東端はまだ難波橋まで達していない。天満宮のすぐ西には「十丁目スジト云」とある。これは現在の天神橋筋商店街のことだ。今でも年配の人は「じつちよめ（十丁目）筋商店街」と呼ぶことがある。天神橋筋の北詰が十丁目だったことを物語っている。

天満宮のすぐ北側には、徳川の世に整備された「寺町」が東西に連なっている。「堂嶋米市場」のすぐ西にある丸囲みの「大」の字の呉服店は、大丸の前身である呉服店「大文字屋」だろうか。北側を流れる川は、埋め立てられる前の「蜷川」。興味深いのは、現在の扇町公園に当たる場所に描かれた「ゴモク山」。

「ゴミの山」のことで、当時、大坂市中から出たさまざまなゴミや廃棄物が積み上げられ、ひとつの山になっていたらしい。積もりに積もったゴモク（ゴミ）のせいで異臭が発生し、突然変異の大ムカデが出たとか出なかったとかの逸話も残っている。

現在の北区は、梅田を中心とする上質な都市空間が形成されているが、約200年前の観光マップには人工的な「ゴミの山」がランドマークとして描かれていた。観光マップであっても、当時の都市生活の光と影が、きちんと記録されていたのだ。（終）

北区古地図ワンダーランド

点と線が結ばれる瞬間 空海から遊女までを 飲み込む 「梅田」という名の 巨大な舞台

本文／西野仁
写真キャプション／
浅香保ルイス龍太
地図提供・
まち歩きガイド／
本渡章



(左上) 全国でも珍しい歯痛に効く歯神社
(左下) 露天神社のシャッターに描かれた古代大阪の地図
(右) 近代的なビルに囲まれた網敷天神社御旅社



『弘化改正大坂細見図』(1845/弘化2 播磨屋久兵衛)
左下には「露天神」とあり、そのあたりは「曾根崎村」。寺町の西端には、新御堂筋建設時に建設用地にかかったために今は真面へ遷座した「寒山寺」が。中央上には「太融寺」「円頓寺」そして「北ノ天神」(網敷天神社)が見える。寺社は簡単には遷座したり消滅したりしないので、古地図を見るときの目印にもなる。

今号のつひまぶは古地図号。時代別の古地図を並べて紹介しているが、古地図といえども、この人、古地図マイスターの本渡章さん。一緒になにかしていただきたくて、まち歩きをオフアールしてしまつた。

恐る恐る本渡さんにお願ひしたところ、それなら梅田を全域、じっくりと午前・午後、にまたがるプランでまち歩きしましょう！と、うれし過ぎる超弩級のお返事が。ほどなくして、「光であり影であり、メインでサブで、マクロでもミクロでもあるウメダ」とキャッチフレーズが書かれた「梅田曼茶羅」としか呼びぶようのないような、梅田スポットが完全網羅された、恐るべきコース案が送られてきたのだ(77左)。これ、1日以上かかるんでは、というすごいコースだが、いざ募集してみると、チラシが出来上がる前に、瞬殺で満席に。おかげで1枚も配布されない幻のチラシが大量に残ることになってしまった。

うーむ、深い。曾根崎には恋があり、酒があり、情があり、覚悟がある。どれもが極端で、どれもが人間くさい。

そして太融寺へ。嵯峨天皇の勅願で弘法大師・空海が創建し、天皇の皇子・河原左大臣源融が七堂伽藍を整えた。境内には芭蕉の句碑や淀君の墓もごく自然に同じ空間に並んでいて、歴史を超えたスベクタクル感がある。それがホテル街のど真ん中であって、聖と俗が同居しているのが、梅田らしさなのかもしれない。

時代を超えてつながる宿命の線

お次は網敷天神社。嵯峨天皇を祀った神社に、菅原道真公への信仰が重なる。今回のまち歩きの本質である、「歴史の重なり」を感じる事ができる場所だ。道真公が船綱を巻いて座したから網敷となったという逸話を聞いた瞬間、午前中に見た露天神社のシャッターに描かれた古代の大阪が思い出され、見えないはずの水辺の気配が立ち上がる。

歯神社ではちょっとしたハプニングが。なかなか着かないので、恐る恐る本渡さんにお聞きすると、「迷いましたね」とポツリ。淀川の度重なる氾濫を歯止めした神社はなんと、古地図マイスターをも歯止めしたのだ。恐るべし(笑)。

この後茶屋町の凌雲閣跡を経て、ランチ休



網敷天神社御旅社でレアなゴジラお守りをゲット！



ヨドバシ北側「梅北道路復活期成同盟会」地下道竣工記念銘板の近くにキン肉マンのマンホール



出入橋の「きんつば」。食べ歩きもまち歩きの楽しみのひとつ

かくして、2月28日(土)、この時期にしては寒さがマシな土曜の朝に東梅田駅に集合したのは15人。ハンチング帽がおしゃれな本渡さんを先達とした、梅田を縦横に見てまわるまち歩きのはじまりだ。本稿でコースをすべて紹介するのは不可能なので、ほんの一部をご紹介します。

最初に訪れたのは、露天神社。お初と徳兵衛の「曾根崎心中」でおなじみの神社だ。昨今は映画「国宝」の影響で、若い女性で大にぎわいの恋人の聖地。が、しかし、本渡さんが向かったのは、社務所横にあるシャッター。なんと、露天神社のシャッターには、古代の大阪の様子が描かれているのだ。見ると、ここ曾根崎周辺は海。海に浮かぶ島として描かれているではないか。そうか、だから水辺を連想させる「曾根崎」と名付けられているわけか。摩天楼が林立する現在の風景からは想像もできない景色が広がっていたことが、地名からは感じ取れるというもんだ。すげー。

遊女が神となり、大師の寺が歓楽街を抱く

次に向かったのは法清寺、通称「かしくさん」。ここにも曾根崎新地らしさが色濃く残っている。先ほどの曾根崎心中のお初と同じ遊女・かしくが酒乱の果てに兄に手をかけ死罪となりながら、断酒節の神霊として祀られているのだ。この振り幅はなかなかえげつない。ところで、お堂には絵馬の代わりだろうか、酒断を願うしゃもじがたくさんつるされている。本渡さんいわく「しゃもじはお米を、掬(すく)います。困っている人を、救う」と掛けてあるそうです。かしくさんの遺品にもしゃもじがあったことにもちなんでいいます」とか。

憩もそこそこに、梅田ランプ西にあったかつての梅田墓地から浄祐寺へ。ここでも曾根崎の遊女・菊野との色恋沙汰が「五代力恋緘」という歌舞伎になったと聞き、狂気じみた恋の舞台が、ただの史実で終わらず芝居となり、語り継がれることで現代に生き続けていることを思うと、梅田は、地図や歴史だけじゃなく人間ドラマも蓄積している場所なんだということに気づかされる。

大阪駅前第1ビル屋上の福永稲荷大明神へ。ビルの上に神社という時点で驚きだが、もとは狐塚であり、さらにさかのぼればこのあたりは、渡辺伊豆三郎が開拓した場所だとか。「渡辺伊豆三郎の祖先は、太融寺で紹介した源融。だから、渡辺一族は天皇の血筋ということになります」と。時代を超越して、古地図で見た点と線が線になる瞬間だ。すげー！伏線回収ではないですかっ！

ゴールは梅田新道交差点北西角にある、「大阪市道路元標」。文鎮のような分銅のような不思議なかたちをしたモニュメントは、国道1号・2号・25号・26号・163号・165号・176号の計7路線の終点・起点となっている、道路のハブのような場所だ。この、四方八方どこへでも行ける場所にて、梅田を隅から隅まで歩くまち歩きは終了。2000歩超え、昼食挟んで4時間超えのトライアスロンまち歩きとなった。本渡さんはじめご参加のみなさん、お疲れさまでした。その後、足が棒になったことは言うまでもない。本渡さんの恐るべき健脚に脱帽だ。(終)



『最新の北区』(1936/昭和11 夕刊大阪新聞付録)入舟が梅田貨物駅と直結しており、船運と陸運がここで連結していたのが分かる。入舟は、中之島の北側を流れる堂島川とつながっている。



堂島薬師堂
今から1400年余前の593年(推古天皇元年)、聖徳太子が最初の官寺となる四天王寺を造営した際、難破した資材運搬船が漂着した洲(しま)に「堂宇」を建てたのが起源と伝えられる。現在の御堂は、現代的なビルと調和を図るため、ミラーガラスと石で構成したモダンなデザインとなった。外装の銀色のガラスは、御本尊として祀っている薬師瑠璃光如来にあやかっている。節分のときにおこなわれる「お水汲み」は、堂島・北新地の早春の風物詩として定着している。

淀殿之墓(太融寺)

平安時代の821年(弘仁12)、弘法大師・空海が嵯峨天皇の勅願によって建立したのが太融寺。大阪キタの繁華街にたたずむ同寺は、まさに都心の異空間。周辺の喧騒とは打って変わって、丹精に手入れされた境内には清らかな空気が満ちている。そんな境内の片隅に、太閤秀吉の妻だった淀殿の墓がある。元は鴨野の弁天島(現在のOBP付近)にあった淀殿の墓が、1877年(明治10)、城東練兵場(現大阪城公園)造成にあたり、太融寺に移祀された。



本渡章(ほんどあきら)さん

1952(昭和27)大阪市生まれの作家・古地図研究家。大阪を中心とする都市史や地理、暮らしの変遷を、古地図を手がかりに読み解く。著書に『カラー版大阪古地図むかし案内』『古地図が語る大災害』(創元社)『古地図で歩く大阪ザ・ベスト10』『大阪古地図パラダイス』(140B)など。文章活動のほか、講演やまち歩きなどもおこない、地図を通して地域の記憶を掘り起こす活動を続けている。地図のなかに刻まれた人々の暮らしやまちの姿を、現代の風景と重ね合わせて描く筆致は、他に類を見ない。





御堂筋はまだ細く 中之島には大阪ホテル 大大阪のリアルを知る 決定版

つひまぶ編集長 浅香保弘イラスト

1924年(大正13)発行の『大阪市パノラマ地図』は、大阪古地図界のなかでもとりわけ楽しい1枚だ。精緻なイラストがびっしり描き込まれた鳥瞰図は、時間を忘れてずっと見ていられる。虫眼鏡が必須の細密さだが、建物ひとつひとつがきちんと描かれており、ほーっ!とうなってしまう。そんな地図を細かく見ていく前に、この地図が描かれた大正後期とはどんな時代だったのか、ざっと振り返っておこう。

1924年の大阪は「大正時代」の幕開けを目前に控えた、活気と発展のエネルギーに満ちた都市。第1次世界大戦を経て日本の経済が飛躍的に発展した時期で、大阪は、重工業や紡績業などの工業が隆盛を極め、「東洋のマンチェスター」と呼ばれる

近代都市・大阪の躍動を俯瞰で描いた
大阪市
パノラマ地図
(大正)

ほどの工業都市として繁栄していた。1925年(大正14)の第2次市域拡張によって大阪市は人口・面積・工業出荷額で東京市をしのぐ国内最大の都市となり、「大正時代」を迎える。『大阪市パノラマ地図』とは、そんな時代の空気を映した地図なのだ。では子細に見てみよう。

大阪駅は2代目。駅の北側には、鉄道物流を担う貨物駅(梅田貨物駅)の広大な用地が確保されている。工業・商業都市として発展していた当時の大阪にとって、鉄道に

よる貨物輸送は極めて重要だった。この広大な場所は、うめきた再開発がはじまる2010年代まで、長く梅田北側の風景をかたちづくっていた。

大阪駅の南西には、「梅田入舟」が描かれている。梅田入舟と入堀川は、江戸時代に開削された曾根崎川(堀川)と連携し、堂島川や土佐堀川方面から大阪駅近くまで物資を運ぶための、重要な水路だった。つまりここは、鉄道による陸運と船運の結節点。しかし入堀川は、この地図がつくられた直後に姿を消す。まさに、開発の波のなかで姿を変えつつある都市の一瞬が、切り取られた格好だ。

大阪駅南西には阪神梅田駅が地上に見え、

南東側には阪急梅田駅がある。当時の阪急梅田駅は現在とは位置が異なり、国鉄(現JR)の線路をまたいで南側に乗り入れていた。そして市民の足である市電(路面電車)が、大阪駅を起点に市中を縦横無尽に走る。

この時代の大阪駅周辺は、旅客ターミナルとして成長しつつ、巨大な貨物ヤードを抱え、市内を市電が走り、私鉄各社が都心に乗り入れよう工夫を凝らす…。そんなダイナミックな変貌の途上にあつた。

まちな様子も現在とは大きく異なる。天六には、市電がぐるっとまわる特徴的な線路が描かれている。そして御堂筋。このときはまだ拡幅前の狭い4m道路。この時代の目抜き通りは、市電も走る堺筋だといふことが、この地図を見ると一目瞭然だ。天満堀川が流れ、源八橋や川崎橋の場所には渡し舟が描かれ、水都大阪の面影が濃い。現在のOAPのある場所には三菱金属大阪製錬所の工場があり、天満駅の北には紡績工場の煙突が林立している。大阪が「東洋のマンチェスター」と呼ばれるほど工業が集積していた都市であつたことが、地図からも読み取れる。

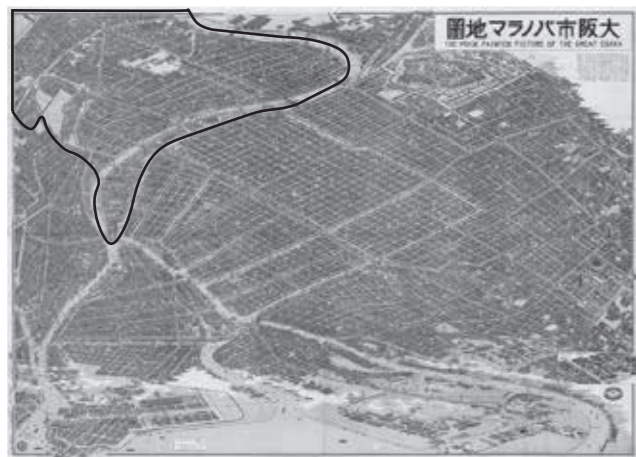
文化・公共施設にも注目だ。現在の大阪地裁の場所には控訴院、曾根崎には北区役所、豊崎には豊崎町役場、中津の北野中学校(現・北野高校)、大淀の関西商工(現・関西大倉学園)、豊崎の梅花女学校(現・梅花学園)といった学校群、本庄産院、堀川乳児院、天六の北市民館など、当時の暮らしを支えた施設の姿も確認できる。

中之島には、大阪城に移転する前の豊国神社が鎮座し、明治時代から大阪の「顔」だった大阪ホテルも描かれている(しかし、この年に火事で全焼した)。

また、びっしり描かれた瓦屋根のまち並みからは、1909年(明治42)に天満から梅田の大半を焼き尽くした「北の大火」を乗り越え、たくましく暮らす人々の息づかいが伝わってくるようだ。

『大阪市パノラマ地図』は、大正後期の大阪が、最新のインフラ、巨大資本、そして西洋文化を取り込みながら、アジア屈指の都市へ突き進んでいった熱気——すなわち大正時代前夜の空気を、今に伝えてくれている。(終)

現在の北区はだいたいこの枠内



『大阪市パノラマ地図』(1924 / 大正13)
鳥瞰図形式の古地図。
天六の「大阪くらしの今昔館」のミュージアムショップで復刻版ポスター(73cm×102cm)が販売されている。原本は市立中央図書館などで閲覧可能。



真つ黒だ。

つひまぶ編集長 浅香保ルイス龍太

真つ黒だ。
大阪大空襲によって被災したエリアが黒く塗られているこの『戦災概況図』を見ると、そのすさまじさに、あらためて息をのむ。太平洋戦争末期、交通の要衝だった北区はアメリカ軍の大規模な戦略爆撃の標的となり、ほとんどが灰燼に帰した。

『戦災概況図』は、その苛烈な被害を記録する、最も視覚的で、かつ確かな資料の1つだ。同図が示す北区の被災状況は、ほとんどが「全焼」または「半焼」を示す黒色で塗りつぶされており、その被害の甚大さを雄弁に物語っている(空襲別の爆破地域は、赤色の斜線で描かれた)。

大阪大空襲の惨劇

第1回目の大阪大空襲は1945年(昭和20)3月13日23時57分から14日3時25分にかけておこなわれ、約3時間半の間に計274機のB29爆撃機が襲来して焼夷弾を投下した。アメリカ軍の照準点は、北区扇町、西区阿波座、港区市岡元町、浪速区塩草で、都心部を取り囲む住宅密集地を標的にしており、約2000mの低空から一般家屋を狙った夜間低空爆撃だった。

空襲警報とともに、家の光が外に漏れないように灯火管制が敷かれ、まちは灯りが消え、大阪市中は暗闇のなかにいた。

3月10日には、すでに東京が大空襲を受け、焼け野原になっていた。12日には名古屋が焼かれ、次は大阪だといわれていた。グアム、サイパンから飛び立ったアメリカ軍のB29爆撃機が次々と大阪上空に襲来。先頭の爆撃機がナバーム弾(大型の焼夷弾)を落とし、後続の爆撃機はそれを目印に次々にクラスター焼夷弾(内蔵した38個の小型焼夷弾が空中で分散して落下する)を投下した。そしてこのクラスター焼夷弾は、爆発するのではなく、燃えた油を吹き出すもので、木でできた日本の家を燃やすためにつくられたものだった。

中心市街地を焼き尽くしたこの空襲では、3987人の死者と678人の行方不明者が出た。

この時、「梅田のほうは燃えていない」と誘導されて、猛火に包まれた深夜の難波や心齋橋から、営業していないはずの地下鉄に乗って避難したという体験談が、複数語られた。いずれにせよ、大混乱のうちに、市内は焦土と化した。

第2回目の大阪大空襲は、6月1日9時28分から11時にかけての約1時間半にわたっておこなわれた。アメリカ軍の照準点は福島駅近辺他、北区南部。計509機が襲来し、大阪港と安治川右岸の臨港地区や城南

の陸軍施設周辺など、8・2kmに壊滅的な被害をもたらした。

第3回目の大阪大空襲は、2回目から1週間後の6月7日11時9分から12時28分の約1時間20分。アメリカ軍の照準点は、都島区高倉町、鶴橋駅付近、天王寺駅付近。そして城東の大阪陸軍造兵廠。

しかし、大阪陸軍造兵廠を狙った爆弾が大きく外れて、長柄橋を直撃。さらに機銃掃射も加えられたため、橋の下に避難していた約400人の市民が犠牲となる悲劇が起きた。戦後、橋は架け替えられたが、弾痕が残された旧長柄橋の橋桁は、戦争遺構として現在も残されている。

また、旭区の城北公園には、四国から勤労動員で来ていた繊維工場の女学生をはじめ、付近の住民が多数避難していた。そこへ機銃掃射が集中し、数百人から千人にのぼる犠牲者が出たと伝えられている。

第4回目の大阪大空襲は、6月15日8時44分から10時55分にかけての約2時間10分。

アメリカ軍はこの空襲をもって指定工業集中地区の破壊を完了したとし、次の攻撃目標として中小都市を含む180の都市をリストアップした。リストでは大阪市はすでに破壊済みとされ、以降は住宅密集地ではなく、工場や造船廠を狙った空爆がおこなわれた。

8月14日の第8回目の大阪大空襲は、日本のポツダム宣言受諾が決まっていたにもかかわらず、敢行された。約150機のB29爆撃機が大阪陸軍造兵廠を狙い、約700個の1t爆弾を集中的に投下。国鉄京橋駅周辺でおびただしい犠牲が発生したことから、この空襲は、「京橋駅空襲」あるいは「京橋空襲」とも呼ばれた。

統計では見えない
可視化された傷跡

この『戦災概況図』は、終戦直後の1945(昭和20)12月、戦災の概況を復員帰還者に知らせるために、第一復員省資料課によって作成された。

まえがきには、「当時帰還しつつあった復員軍人軍属の内地陸上にあたっての質問第一声が、概ねまず戦災概況についてであること」を知り、この調査の重要性とその迅速な調整の必要とを痛感した」と記されている。例えば、北野、曾根崎、天満、堂島、長柄本庄、豊崎、大淀といった北区内の主要な部分から分かる。逆に、大阪駅、浪花町や中崎の一部、中津の一部、天神橋の一部、中之島東部など、かろうじて戦災を免れたところも知ることができる。

『戦災概況図』は、大阪大空襲の被害を視覚的に示す唯一の地図資料であり、「戦災の統計」では見えない、都市の傷跡を可視化した資料なのだ。

『戦災概況図』は、焼け野原を「まっさらな都市空間」として捉え直す出発点でもあった。破壊の記録であると同時に、復興の設計図の原点でもあった。

同時に、戦災の悲劇を「地名」や「場所」とともに伝えることができる「記録の証人」であり、失われた記憶を掘り起こす手がかりにもなった。

現代では、戦前と戦後の都市構造の変化(道幅、区画、土地利用)を比較する「都市史研究」、延焼のパターンや密集市街地の危険性の分析に使用する「防災研究」、戦災の記録を地図でたどる教材として利用する「教育・平和学習」などの分野で、再評価されている。(終)



『戦災概況図大阪』(1945 / 昭和20)
濃い黒は「全焼」、薄い黒は「半焼」。地図の上の別レイヤーに手書きで示された斜線(実際は赤斜線)は、空襲別の爆発を表している。



『2万5千分1地形図 大阪東北部 1967測量』国土地理院 1969発行（「」は編集部追記） ※2次元バーコードは検索画面へ

昭和42年の 大阪プール 鉄道管理局 淀川区

つひまぶ編集長
浅香保リス龍太

1967年（昭和42）の国土地理院発行の『2万5千分1地形図』。わずか60年前の地図を古地図と呼んでいるのかどうか分らないけれども、AIに聞くと、古地図は一般に近代以前だが明確な定義はないという。しかしキタの移り変わりは激しい。60年前の地図はすでに立派な「歴史」だ。

ちなみにこの時代の大阪は、1970年（昭和45）の「70年大阪万博」を目前に控え、都市開発とインフラ整備が急ピッチで進んでいた、高度経済成長期のまさに最盛期。

そもそも、この地図には、今はなき旧行政区「淀川区」が載っている。

「淀川区」は1943年（昭和18）に東淀川区と西淀川区の淀川左岸区域が分区分し、これに北区と此花区の一部を加えて誕生した。その後、1989年（平成元）2月13日、大阪市の行政区再編で全域が北区と合区し、新たな北区として再編された。ちなみにこの合区は、2000年代に全国でおこなわれた「平成の大合併」とは無関係。

毎年10月に開催される「北区民カーニバル」は、淀川区と北区が合区したのを機に、両区民の融和を図るためにはじまったものだ。扇町公園のなかにある卵形の図形は、旧大

阪プール。1950年（昭和25）、日米国際水泳選手権開催のため、5カ月の突貫工事で建設された。ナイター照明付きの屋外プールで、U字型の巨大な観客席を備えていた。かつてギネスブックに「最も観客収容数の多いプール」として1万3614人の収容が認定されたほどだ。背泳用の握り手をスタート台に設置したのは、旧大阪プールが日本初。国際的な水泳大会だけでなく、プロレスなどの各種のスポーツイベントも開催され、浪速のスポーツのメッカと呼ばれた。力道山vsルー・テーズのプロレスもここ。80年代には、マイルス・デイビスのコンサートも開かれた。1989年（平成元）に営業を終了。今は競泳スタート台のモニュメントが、往時をしのばせる。

大阪駅の北側には「鉄道管理局」。ペンタゴンに似た六角形が特徴的な庁舎は、昭和初期のモダニズム建築の重厚な建物だ。1928年（昭和3）に建てられ、ずっと大阪駅北側のシンボリックな存在だった。

1987年（昭和62）の国鉄分割民営化後はJR西日本の本社ビルとして利用され、今はご存じ、「ヨドバシカメラ マルチメディア梅田」。暫定的にゴルフ練習場となり、都心の一等地に広大な打ちっぱなし練習場が出現したことも、当時話題になった。

このように、わずか60年前の地図であっても、生々流転、ランドマークですら大きな変化があることが分かる。新梅田シティも、当時はダイハツディーゼル本社・大阪工場だ。さらに、長柄西には関西大学天六学舎があり、「文」の地図記号も多数。それらも現在では、多くが消えてしまった。南無ということは、やはりこれも立派な古地図ということ。（終）

キタのええもん キタの手みやげ

千草の味を持ち歩く 天満御旅所の焼きそばパン



天満御旅所
天神橋 4-4-1
平日 / 15:00 ~ 18:30
土日 / 13:00 ~ 21:00
定休日：火曜、第2・第4月曜

JR天満駅から徒歩30秒、駅南側すぐのコンテナのような建物が並んでるところの一番商店街側に、「天満御旅所」という立ち飲み店がある。店名は、かつてこの場所に大阪天満宮の御旅所があったことに由来する。仕事帰りの一杯、買い物途中や参拝途中の寄り道など、どんな理由でもふらりと立ち寄り、気づけばもう一杯頼んでしまおう。天満らしい場所だ。そんな天満御旅所でひそかに人気を集めているのが、今回紹介する焼きそばパンだ。立ち飲み店で焼きそばパン？

あ！よ！と威勢のいい声とともに出されたお皿には、なるほど焼きそばパン。一見、奇異だが、これがいけるのだ。

まず感じるのはほんのりとした温かさ。コンビニにはない、飲食店ならではのぬくもりだ。そして、スパイシーなソースの香り。甘みと酸味が口のなかにほんのり広がり、まるで緑日の焼きそばを大人の一品に仕上げたような、親しみやすさと上品さが同居する味わい。

これはぜひ、思い切った大きいかぶりついてほしい。ふわっとしたパンの軽やかさの後、すぐに焼きそばのコクが押し寄せてくる。これが酒に合う。麺はしっかりと焼かれていて香ばしく、ソースは濃過ぎず、とって物足りなさも感じさせない。食べ進めるほどに「ああ、このバランスがええなあ」となるのだ。それでいて、さらに食べ進めるとソースがじんわりパンに染み込み、全体がひとつの味としてまとまっていく。この「後から完成するかんじ」も、大きな魅力だ。酒のアテになるよう、少し小ぶりなのもいい。

じつはこの天満御旅所、天満の老舗お好み焼焼店「千草」が手がける新業態の立ち飲み鉄板焼き店なのだ。ということは、焼きそばパンの焼きそばは、千草の味そのもの。千草といえば天神橋筋界隈で地元の人に愛され続けてきたお好み焼の名店だが、焼きそばの完成度の高さでも知られる。昼夜問わずの人気店で、千草で食べるとなると、行列に並ぶこと必至だが、天満御旅所だと、今のところは並ぶことなく、あの、焼きそばにありつける。

天満御旅所のオーナーであり、千草の大将でもある藤川裕規さんは、「千草の味をもっと自由に楽しんでほしい」、パンに挟んだのだとか。これなら、「気軽に食べ歩きもしていただけるので、天神橋筋商店街を歩きながら、ぜひ、テイクアウトができるのだから、手みやげにもぴったりだ。

ただし、こだわりパンの仕入れの都合で、1日6個限定。でも、「パンがあればつくります」と。狙って買いにいけるのもいいが、ふらっと立ち寄って出会えたら即購入したい一品だ。ソースの香りとともに、ぜひ、このまちの雰囲気を感じてほしい。

もちろん、自分で食べるだけでなく、手みやげとして「これじつは、あのお好み焼の千草の焼きそばなんよね」とドヤ顔で言いながら、相手に渡してあげると、おっ！となること受け合いたい。

天満の日常が、無理なくひとつに収まってくる。このまちの「ええもん」がまたひとつ育っていく。（西野仁）

角打ちの 放浪記

母と3兄弟 立ち飲みナガタ みんなの居場所



滝川公園の南西角に立つと目に飛び込んでくるのは、店頭に積み上げられたビールケース。そしてその上の壁に「ながた」の文字。1968年（明治元）創業、160年近く続く業務用酒類販売店「酒のながた」です。

小売りもしている店内には、魅惑的な酒類が並んでいますが、ふと隣に目をやると、自動販売機に向こうに「立ち飲みナガタやってみます」と書かれたのれんが掛かっています。

入っていいのかな？ 恐る恐る扉を開けた私を出迎えてくれたのは、永田武子さん御年79歳。1971年（昭和46）に結婚してこのまちにやってきました。その頃には、すでに角打ちも営業していたそうです。「大きな鉄板があって、焼きそばを焼いたりしてたかな」。

看板メニューをたずねると、「たかひろ（三男）の出し巻き！ 冬ならタツちゃん（次男）の粕汁に、おかんのおでんやね。ヒロくん（長男）は、カツオの塩タタキでええかなー？」と酒屋のレジの方に向かって武子さんが問いかけます。家族4人が揃えば、スタッフがお客さんより多くなる日もあるとか。

「ちくキユウを食べてみ！」と常連さんがすすめてくれたのは、キユウリが丸ごと穴に収まったちくわ。高知名物だそうで、ちくキユウ専用の大きめのちくわを温めて、キユウリを差し込むらしく、なかなかの迫力です。「取引先に高知ゆかりの企業があるから、高知のメニューが多くなって」とヒロくん。

さあ、飲むよーっ！



立ち飲みナガタ
天満 4-5-15
Tel: 06-6351-1971
17:00 ~ 20:00
定休日：水・土・日・祝

飲食店によくあるガラスの冷蔵庫をのぞき込むと、品質管理を任せられる酒販店にしか卸されない貴重な日本酒や、「酒のながた」のために特別に瓶詰めされた「ながたラベル」など、信頼と実績の「酒のながた」だからこそ並べられる日本酒がずらり。運良く、不定期に開催される1時間1000円飲み放題の日。信じられない。まさに大人のドリンクバー♡グラスになみなみ注ぐもよし、少しづつ何種類も楽しんじゃうもよし。ここは、天国か？ うおおおお〜！！ 最高っ！！

近隣の会社にお勤めのお客さんが多いとのこと。駅までの道のりにこんなところがあったら、吸い寄せられちゃいますよね。最近では、SNSで「酒のながた」を知って日本酒を買いに来る女性も多いそう。すると自然に「立ち飲みナガタ」にたどり着くわけです。と、そうこうしているうちに、次男のタツちゃんが横で飲んでいないですか。いいなあ。過去に1度、角打ちを閉めたときは、常連さんたちが近隣のビルの1室を借り、「酒のながた」でお酒を仕入れて、集まって飲める会を立ち上げちゃうほど、みんな大好き「立ち飲みナガタ」。みんなの居場所なんですね。もちろん、武子さんにとっても、ご主人に先立たれて1人で夕食を取るよりも、お客さんや息子たちに囲まれて過ごす夜は楽しく、ここは家族の居場所でもあるでしょう。

旨い酒と幸せ話が心が満たされ、帰りはご機嫌、千鳥足。ノビイ、ノビイ（終）

ハイハイの赤ちゃんも、走りまわる子どもも、パパもママも、のんびりほっこりとした時間を過ごす——。そんな光景が広がるのは、中津・豊崎・堂島に拠点を構える子育て支援施設『つどいの広場ぐうぐう』です。運営するのは、『一般社団法人あおぞら湯』。子育て支援に加え、防災ガイドブック『大阪北区ジシン本』の事務局として防災講座の実施や啓発にも取り組んでいます。代表を務める笠井あゆみさんは、3人の子どもを育てる母親であり、保育士や心理カウンセラーの資格を持ち、小学校のサッカーチームやミニバスのコーチをするなど地域活動にも参加しています。子育て支援、防災、地域活動——これらがどうつながっているのか。公務員として働きながら3歳の息子を育てる私には、気になることばかりです。話を聞いてみると、そこには子どもたちの健やかな成長を願うひとりの母親としての思いが垣間見えました。

負けず嫌いのバス少女

笠井さんの出身は兵庫県尼崎市。子どもの頃は校庭で遊びまわり、いつも真っ黒。市の選抜に選ばれるほどバスケットボールが得意で、好きな教科は算数。とにかく負けず嫌いだっただと言います。高校は大阪の名門女子校へ進学。ところが男っぽい性格だった笠井さんには、女子校の雰囲気合わなかったそう。「バスケットにも入ってみたいけど、初日でレギュラーになれそうなくらいで。物足りなさを感じていました」。そんなときに起きたのが阪神・淡路大震災。「被災した自分と、なにも変わらない大阪の学校生活のギャップが

しんどくなって、高校2年で部活を辞めました」。それから勉強に打ち込んだ：と思いきや、「勉強と：恋愛ですわ」と笑います。保育士になる夢を抱きつつも、大学は農学部へ。アメフト部のマネージャーをしながら、バスケット部に所属しました。卒業後は住宅の内装・建材メーカーに就職。企画開発や営業支援、広報など幅広い仕事をこなしました。

「3年目には企画リーダーを任せましたが、自分の先輩にあたる人たちをまとめるのがけっこう大変です」。懸命に仕事を続けましたが、やがて限界を迎え、長期の休みを取ることに。27歳、初めての挫折でした。

療養中、改めて自分の進みたい道を考えます。そして選んだのが、当初の夢だった子どもにかかわる仕事でした。塾講師のバイトをしながら通信制の短大に入り直し、2年間の勉強を経て、保育士資格と幼稚園教諭免許を取得。実習先だった尼崎の保育園に就職しました。「前の仕事と違って、ストレスが全然なかったんです。資本主義的な価値観で働かなくていいんですね。目の前にいる子どもたちのことを第1に考えて仕事をするというのがシンプルで分かりやすく、自分に合っていると感じました」。

もともと強かった「勝ち負け」へのこだわりも変わったのでしょうか。「勝ち負けには今でもこだわりますよ。夫婦げんかとかね」といたずらっぽく笑う笠井さん。「だからスポーツが好きなのか。けんか上等！っていうのは、私の心の置き方、生きざまだと思います」。

友要らん！っていうタイプなので、距離感を大切にしています」。

「でも私、めっちゃ怒られる代表なんですよ」と笑う笠井さん。「私が代表ではあるけど、スタッフと立場は対等だと思っています。みんな優秀なので、私がすべて決めるのではなく、講座やイベントをするときも、やり方は任せています。なにかあっても私が謝ればいいし、失敗は怖くないです。けんかは強いと思ってるんで（笑）」。

みんながかかわれる『余白』があることで、スタッフが生き生きと活動できるようです。

防災は「まちづくり」

防災の取り組みは「あおぞら湯を立ち上げたときから、『あおぞら防災ママ認定講座』を続けています。子育てセミナーでよく顔を合

はじまりはピラティスサークル
その後、結婚を機に中津で暮らしはじめた笠井さん。3人の子宝に恵まれますが、子どもの成長を見守るなかで思い悩むことも多かったそう。第2子を出産後、仕事を辞めて育児に専念することになります。「私がこの子たちを育てねば！って自分を追い込み過ぎて、気持ちも沈んでたかなあ」。そこで、体を動かすことで心も元氣になれるような場をつくらうと、2011年（平成23）、ママ友と一緒に産後ピラティスのサークルを立ち上げました。

「自分の価値観だけでなく、周りを頼ろう、顔が見えるつながりをつくらうと思って。中津には祭りもないし、地元の人と新住民があまり交ざっていないと感じていたので、自分から交ざってみようかなと。誰かを支援したかったわけじゃなくて、一緒に子育てできる場をつくりたかったです」。

2年後には中津に地域活動協議会が発足。会長に相談し、中津福祉会館を使わせてもらえることになりました。「定期的に会館の部屋を開けて、ただそこにいるっていう日をつくったら、近所のママたちがたくさん来てくれた」。

これってかなり需要があるのでは？と考えていたときに、ちょうど中津3丁目で大阪市の地域子育て支援拠点事業の公募がありました。「え、私のことやんな？って思いましたね！」。

2016年（平成28）、事業の受託者となり『中津つどいの広場ぐうぐう』を、その2年後には『豊崎ぐうぐう』をオープンしました。こだわったのは開設する場所。

「中津も豊崎も地域の会館の近くで探しました。今朝も中津福祉会館の2階で子連れのマ

わせる先輩支援者から、子育て支援と防災を一緒にやってみたらとすすめられて」。

やってみると、「これってまちづくりやな」と感じたそう。「阪神・淡路大震災で被災したときを思い出しました。つながりが希薄でも、子育て中でも、防災ならつながれる。社会的に弱い立場に置かれやすい人ほど災害の影響を大きく受けるので、子育て支援をしている私たちがやろうと思いました」。

ジシン本とかかわりは、子育て世帯向けの講座を担当したことがきっかけ。本を制作したのは区役所でしたが「区民のための自助の本だから、区民に届けられる人に事務局をやってほしい」と声を掛けられました。

「私には荷が重いと思っただけ、やってと言われたってことはできるってことやから、やらなアカんで！とスタッフに背中を押されて。ジシン本サポーターのみなさんに助けられながらやっています」。

まちづくりに関する区の施策がどのように進められているかを知るため、北区の区政会議委員にも応募。約8年間務めました。そのなかで芽生えたのは「地域ってなんだろっ？」という疑問。

「区役所の人はよく『地域』という言葉を使うけど、町会長のことしか見えてないのでは、と思うことがあります」。

地域活動をしていると、周りから「地元の子やろ？」と言われることも多いそう。「地域活動は地元の人が担うもの、という前提にも違和感があって。地域活動にかかわらない新住民が多いなかで、私になにができるか、新住民と地元の人たちの接点をどう生み出すかを考えています。中津小学校でやっているサッカーチームやミニバスもその1つ。役所や地域活動の場で行われる『みんな』ってほんまに『みんな』なの？っていう問いを

マピラティスをやっていました。1階では百歳体操が。お互いに、おはようございますって声を掛け合って、それぞれの活動部屋へ。そんな光景が11年続いています。強くはつながらない。ただそこにある、ということが大切だと思っています。赤ちゃんがいてお年寄りもいて。そういうのが地域かなと」。

依存しない、疲れない支援を

小さい子ども3人を育てながらの運営は大変だったのでは？

「あおぞら湯を立ち上げたのは、1番下の子が2歳のとき。当時、メンバーもみんな同世代の子育てをしていたので、子どもが熱出したからシフト代わって、とお互いを頼りやすかったです。共同で子育てができる場をつくらうとしたらワークシェアもできました」。それは心強いし、なんだか楽しそう。「気のいいメンバーばかりです。立ち上げたときから離職率はゼロなんですよ」。

「みんな生き方が自立しているので、組織内ではまずもめません。私自身も、私を好きでいてほしいとかは一切思わない。ぐうぐうでは、各施設でスタッフを固定せずに3拠点をぐるぐるまわるシフトにしています。なので、利用者も主体的に行きたいところに行く。このスタッフがいるから施設に行くという、福祉独特の依存を生まないようにしています」。スタッフも利用者も自立していることがポイントなんです。

「利用者の相談に乗るときも、スタッフには、答えは相手のなかにあるからと伝えていきます。もめごとがあっても相性が悪かっただけ。それなら別のスタッフが話を聞けばいい」。疲いつも持っています」。

昨年からは、大阪市の『こども・子育て支援会議』の委員になり、市全体の施策に目を向けています。大阪男女いきいき財団が実施する『地域防災女性ファシリテーター養成講座』のチューターは4年目。防災における女性のエンパワーメントに取り組んできました。『大阪市地域公共人材バンク』にも登録し、派遣先の地域団体に自身の知識や経験を伝えながら、団体が抱える課題をあおぞら湯の活動にフィードバックしています。

「ぐうぐうやジシン本を続けるために、制度や外の状況を確認していくのが私の仕事。出稼ぎのお父さんみたいな役割ですね」。どの活動も、導いてくれる人との巡り合わせがあったから始められたと言います。「私に足りないところがあるから応援してくれるんだと思います。見守っというあげるからやってみ、と言ってくれる人たちに出会えたことに感謝です」。

これから目指していることは？
「こうでないといけないというのはなくて、どうして？があつて。それに向き合っていくだけかな。でも、自分の限界を知っているの、みんなとシェアするようにしています」。

最後に、笠井さんにとってキタのまちとは？
「この地域で育った子どもたちの姿が、私に答えを返してくれています。昔、小学生だった長男が、普通のお母さんはなあ……！と言ってきたときに、よっしゃ！って思ったんです。彼の周りに比較対象の大人がたくさんいるってことですね。私が地域に主体的にかかわっていったら、子どもたちにとっても裏切れない『ふるさと』になりました。私が育てたんじゃない、地域に育ててもらったんです」。(終)



聞き手・書き手／寺井はるか 撮影／西野仁

子育て支援が
しなかったわけじゃない。
一緒に子育てできる場を
つくりたかったんです。

れない支援”を心掛けています」。
寄り添うけど同調はしない。そんな姿勢がうかがえます。
「相談内容はスタッフ間で共有しますが、直接話を聞いていないことについて、その利用者に声を掛けたりはしません。利用者には、言わないという選択肢もあります。自分が気持ち良くなるためにアドバイスするのは違うと思っています」。
そのマインドがスタッフ全員に共有されていることがすごいんです。
「自立している人だけをピックアップして採用しているからかな。私自身がもともとママ